

国際英語の促進

恵 玲子

I. はじめに

現在英語を国際語として認めない人は少ない。英語はコミュニケーションの道具として世界の人々が使用している。しかしこの英語も国際語として理想的とはいえない。国際語としての英語はある条件を満たせばより長期にわたり存続するだろうと感じられるし、その支配力はより拡大していくと考えられる。しかし過去の歴史で、一民族語の国際支配はいかなる強力な軍事力・政治力・経済力・文化・技術力を背景にしても、決して永久的には続いている。その言語支配が続いている間、諸国民の間には色々なきしみ、摩擦が生じているのである。それは過去の国際語としての地位を得た、ギリシャ語、また中世のラテン語、そして16～19世紀のフランス語と覇権が移行していることから明白である。

そこで視点をかえて、英語を世界の人々の言語として考えてみる。その時、国際語としての英語はすでに英語圏の人々だけが所有する言語ではなくなっている。英・米語は英国、米国地方の英語、つまり方言になるのである。

そこで国際語としてのより理想的な英語の存在に、一民族語でない国際語として、より安定した英語に昇格させるべきである。世界の人々が参加して鈴木考夫博士が言うように米語を基盤とした国際語を作り上げる。その時和製英語もそのモザイクの一部に貢献出来る。本稿では、現在事実上国際語となっている英語、19世紀の終り頃まで外交共通語として覇権を握ったフランス語、そして人工語であるエスペラント語とを対比させることにより、国際語の条件を考察する。

II. 国際語の条件

1. 国際語の定義

国語大辞典によると「国語を異にする民族あるいは国家間で共通語として

使われる言語。エスペラント語・英語・フランス語など」と記されている。また世界大百科事典では「言語を異にする人類相互間の意思伝達手段を容易にし、さらに政治的・経済的に優位に立つ国民の言語を他国民におしつけるという不平等を避けて、国際的に通用させるために考案された言語をいう。」としている。

文化人類学者、Edward Spair (1931)*¹によると国際語として望ましい特性は、一つの文化・価値観がきわめて少なく、違った文化や価値観を持つ人々が抵抗なく受け入れられることであるとしている。

また国際語選択にあたっては、言語学者 Quirk et al. (1972: 3) によると国際語又は、lingua franca (共通語) の選択では政治的・経済的・人口統計学的基準に基づいてされるべきで、絶対に言語的・美的基準に基づくべきでないとしている。以上過去の国際語の役割を果たした歴史を鑑み、本稿では国際語の定義を次のように決める。

「国際語は、言語を異にする人類相互間でコミュニケーションを容易にさせるために考案された言語。」

そこで 21 世紀に渡って栄える理想的な国際語を探るため、国際語として覇権を握ったあるいは握っているフランス語、英米語を取り上げる。

フランス語は 17・18 世紀にヨーロッパ世界で君臨していたが、それは上流階級、宮廷間の外交共通語であった。18 世紀末、1789 年にフランスの王政が倒されたのを契機に 19 世紀に入ると、各国の王政が倒されたり弱体化していった。一方、各国で民族主義の傾向が強まり、中産階級・庶民階級が台頭し、王侯貴族の言語であるフランス語に対抗して、母国の言葉、国語の復権を主張し始めた。また植民地の相次ぐ反乱・独立とでフランス語の勢力はしだいに弱まった。

英語はウィリアム一世(1027-87)の時代より多量のフランス語が導入され、語彙面でたいへん豊かになると伴にエリート層より切り離され、民衆だけの言語になっていた。そのため構造上の簡易化が飛躍的に進んだ。

またイギリスは 1700 年頃には商工業方面でフランスを抜き、世界帝国の確立とで勢力をつけてきた。特に国際連盟でフランス語との相対的關係が明らかになった。国際連盟ではフランス語が公用語にならず、仏・英二言語となり“慣用語”とされた。この取り決めが行なわれたヴェルサイユ会議では、フランスはフランス語を唯一の公用語とすることを主張したが、イギリスがこれを強く阻止した。

さらに第二次世界大戦を経て、国際連合の発足を決めた 1945 年のサンフラ

ンシスコ会議では、状況が逆転した。これら二回の大戦を境に世界の趨勢はイギリス英語からアメリカ英語へと変遷して行く。イギリスの勢力が衰えを見せても強力な経済・軍事・政治力をつけたアメリカ合衆国が英語の覇権を継承してゆく。

以上二ヶ国語の歴史より、フランス語・英米語が国際語として覇権を握った要因を列挙*² する。

1. 母国語話者人口が多い。
2. 移民、植民地などによる地理的分布の広さ。
3. 貿易・商業を通して母国語話者の経済力の強さ。
4. 母国語話者の政治的影響力の強さ。
5. 母国語話者の科学・文化の優位（伝道団や教師の派遣による普及効果も含む）

さらに米国の影響が加わり

6. 軍事・科学・技術の優位。
7. 通信技術（ラジオ・テレビ・電話等）の進歩によるアメリカ大衆文化輸出の成功。
8. 移民国家ゆえ、外国人に対しても比較的寛大で門戸が開かれている。
9. 英米語は一種の「商品」であり、両国はこれを世界に広める努力をしている。

以上今の段階では、言語の相対的な重要性を決定するいくつかの要因を総合的に判断して、英語は Quirk. et al (1972 : 2) が言うように ‘The world’s most important language’ であり、Harrison (1973 : 13) が言った ‘the language of international communication per excellence’ (申し分のない国際コミュニケーション語) となっているわけである。しかし民族語の範囲ボーダーライン上を出入りしているのである。

次に人工語であるエスペラントを考える。過去の歴史からも国際的レベルのコミュニケーションで特定の民族言語の使用は、広範囲での情報収集・発信に明らかに重大な差別を生じてきた。また言語間のランクを生み、民族意識を生み出す要因ともなってきた。そこで様々な特色をもつ世界の人々が、その多様性をお互いに認め、享受し合い、かつ正確な情報を交換し、理解し合う方法として考案されたのが人工国際語、エスペラントの誕生である。

エスペラントの創始者・L. L. ザメンホフ*³ (Ludwik Lazar Zamenhof, 1859-1917) は、1859 年ポーランド東部、当時はロシア領のビアウイストクに

生れた。ユダヤ人の父はドイツ語教師で、家庭では日常言語としてポーランド語が話された。彼の居住区はユダヤ人区だったのでイディッシュが話され、学校での教育はロシア語でなされた。ザメンホフは語学の才能があり早くからドイツ語をマスターしており、ギムナジウムに入ってからラテン語、ギリシャ語を学び、優秀な成績をおさめていた。高学年からは、フランス語・スペイン語をも独学した。

ポーランドは古来、近隣列強の諸国の人々ローマ人・ゲルマン人・ロシア人などの争奪の的となり、何度か分割され、亡国の運命をも経験した。単に各国の政治・軍事的な闘争の場であったばかりか、ローマ・スラブ・ゲルマン、さらにアジアやヘブライの文明が接触・影響し合った。しかし彼らは独自の言語・宗教を持ち、決して溶け合うことなく、文化のモザイク状態にあった。こうした状況の中で、常に虐げられたのはユダヤ人であった。二木氏^{*4}の言葉を引用すると「ザメンホフは、国際語を単なる便利な道具、文字と音との組合せの問題として考えることはできなかった。彼にとって、国際語とは、人が人を差別することがないようにし、民族と民族とが和解するための手段でなくてはならなかったのである。そして、人と人、民族と民族との調和は、上から、すなわち強い者、支配する側から押しつけによって実現されることは決してなく、弱い者、虐げられている者の結束によって実現されるべきものと考えていた。このような考え方から生まれたエスペラントは、当然のごとく、正確であるだけでなく、言語学的素養のない者、ヨーロッパ語の知識のないアジア人にも学びやすいものとなっていた。しかし、エスペラントは、ザメンホフのこうした素朴な“祈り”ゆえに、後年、ヒットラーなど、“右”からは“赤の言語”として、スターリンなど“左”からは危険な国際主義の言語として弾圧を受けることになった。」

しかしこのような弾圧にもめげず、戦後西ドイツでエスペラント運動が復活し現在に至っている。それでは現在エスペラント使用者が世界にどれほどいるかとなるとその実数は推定の域でしかない。少々古い例であるがコロンビア大学教授だったマリオ・ペイ氏（Mario Pei）は1963年に800万人と推定している^{*5}。また、日本エスペラント学会^{*6}では500万人～1000万人いるだろうと推計している。特定の民族の文化・文明に基づかない言語……すなわち中立言語が国際共通語としては最も望ましいはずである。エスペラントの文法構造は付着語^{*7}（膠着語）であるがその言語的基盤はインド・ヨーロッパ語であるから正確には世界全体に共通する中立語というわけにはいかない。しかしエスペラントの基本的構造は、世界の非常に多くの言語に共通す

る性格をもっていて、語彙さえ入れ替えれば、ほとんどの民族語に適合することを1913年にロシアの*⁸ 人口言語研究者 V. チェシヒンは証明している。

それではなぜこの理想高い精神を持った共通語が国連の公用語に採用されないのか、多くの人々はエスペラントは言語の記号的側面だけに着目し、言語の持つ文化性に本質的な欠陥があるとしている。筆者はこの点においては改善発達の余地があると思う。前述したフランス語・英語が国際語として支配した要因とを対照すれば以下のことが言える。1. 話者の数が少ないこと。2. エスペラント語を支持する政治力・経済力がないことが重要な原因である。これらの因子が解決されれば他の要因はおのずと付随してくる。そして将来国際語になる可能性は十分にある。しかし現状では不可能である。

III. 理想的な国際英語にするために

エドワード・サピア (Edward Sapir) は下記のことを述べている。「言語*⁹ というものは、個人にとって重要と思われるような経験のさまざまな項目を多少体系的に並べてみたものにすぎない、というような素朴なとり方がしばしばなされている。しかし、言語とは単にそれだけのものではなく、一方ではまた、1つのまとまりをなし、創造力を有する象徴体系であって、その助けを借りることなく得られた経験を指し示すというだけでなく、われわれに対して、現実に関験を規定するという働きをもつ。これは、言語というものが形式的に完全なものであり、われわれは、言語から暗に期待されることを経験の分野に無意識のうちに投入してしまうからである。」この主張は単一言語だけでない多言語の状況においてはどうか。

我々の見・経験する世界が、我々の言語習慣を通して無意識のうちに形成されるのであるから、異言語・異文化の遭遇は複雑なのは当然である。多言語状況は二言語接触をより複雑にした状況であるので、ここでは二言語、インド・ヨーロッパ言語族に属さない違った言語日本語と英語に焦点を絞る。

よく日本文化は「コンテクストに依存した」文化 (context rich culture とか culture of enriched context) と呼ばれ、欧米文化は「言語に依存した」文化 (context poor culture とか culture of impoverished context) と呼ばれる。この「コンテクスト」*¹⁰ とは「文脈」と訳されることもあるが、通常の意味は、文章の前後関係のことである。記号論などの現代思想の用語としては、ひとつのテキストが成立する場のことである。一番理解しやすい説明が図1, 2, 3, 4*¹¹にあるので参照されたい。

そこで比較文化論・異文化間相互理解の立場より異文化間の関係を三段階

に分けた重久*¹²の意見を紹介する。この方法は二言語間の関係の分析方法に
適応できるからである。

1. 段階的に未分化な関係 (intercultural undifferentiatedness)

互いに相手文化の差異に気づくことなく、相互補換的 (interchangeably) に、自・他の (双方の) 文化のコンテキストで、等しく行動が営まれる段階で、発達的に未分化で原始的な行動様式や、文化のきわめて表面的で大まかな、そして単純な部分の行動様式 (ノン・バーバル行動等) のレベルなどでおこる関係である。

2. 量的な (measurable) 相互影響がみられるようになる段階

互いの文化のコンテキストでの活動が、相手文化との接触・交流の頻度 (量的・時間的關係) を通して、相手の文化での意味内容 (質的關係) にかかわりなく、刺激され、活性化されて「促進」されたり、あるいは同じ相手の文化の刺激 (布置の相違) によって、妨害されて「抑制」されたりするようになる関係 (intercultural facilitation and inhibition) がみられるようになる。

3. 質的な相互作用がみられる段階

これは互いに「助け合う」というような「協力的な関係」 (intercultural cooperation) や、弁証法的な「統合的な関係」 (intercultural integration, cultural organization) がみられるようになる段階である。科学・技術・工業力など、物質文化に優れた国家あるいは文化圏が、芸術・文学・思想など精神文化に秀でた国々や地域社会との交流を通して「ひとつの統合された文化形態」 (unity of the cultures) をつくりあげていく。例えば、古代ギリシャの Hellenism-Spartanism の流れ、Roman-Renaissance の系譜、そして中南米諸国での、インディオ文化とスペインやポルトガル文化との「融合」 (cultural fusion, interculturalization) などによる新しい文化、Hispanic culture の創造や、日本での「和魂漢才」や「和魂洋才」、「和漢折衷」や「和洋折衷」 (cultural eclecticism) などは、このような「異文化の『質的な』統合的關係」 (intercultural anabolism, synthetic relationship) を示すものといえることができる。

それではこの三段階を言語に適応すると、

1. 各語の言語の基本構造を持って互に存在する。
2. 量的な相互影響が言語間、語彙レベルで行なわれる。語彙は、その時代の強力な政治・経済・文化の影響を受け易いため。
例えば、ローマン・コンクエスト後のフランス語語彙が英語へ多量に侵入したこと。現在の日本語に英語が多量に侵入してきていること。
3. 言語の内容の相互作用から発生する新造語、例えば、ドイツ語とヘブラ

	④	⑧	⑥	③	情報伝達様式
日本	Context rich environment 豊富なコンテクストに恵まれた環境	Context sensitive humanity コンテクストに敏感な人間性	Context dependent communication コンテクストに依存したコミュニケーション	High context culture コンテクスト度の高い文化	Contextual communication (Nonverbal communication) コンテクスト・コミュニケーション (非言語コミュニケーション) 「認め強化行動」(ADR) = 「以心伝心」(言外の意味) (動作や態度で示す)(しむける) ↑ 「他者強化行動」(AR) = 「察し」(「ことば」や動作のうらにかくされている意味を「察して」、相手の気持や意図にこたえる。)
欧米	Context poor environment コンテクストの少ない環境	Context insensitive humanity コンテクストに鈍感な人間性	Context independent communication コンテクストに依存しないコミュニケーション	Low context culture コンテクスト度の低い文化	Verbal communication (Noncontextual communication) 言語コミュニケーション (非コンテクスト・コミュニケーション) 「押しつけ強化行動」(FR) = 「自己主張」(直接説得) ↓ 「外的強化行動」(ER) = 「ことば、そのものずばりの意味」(文字とおりの意味、face value)に直接対応する。

図 1 文化形成のパターンと情報伝達様式の比較文化

——「日本型」と「欧米型」の対比——

- 「コンテクスト」= その場の雰囲気, サイン, clue, cue, 手がかり刺激, 文脈, 前後関係, 状況, 情況, 背景, 間柄, 共感, 互いの過去とのつながり, 社会的強化の歴史, 共通体験, 互いの欲求充足のレベル, 了解度, 親密度, familiarity intelligibility, 互いの適応水準, 相性など。

④=自然(自然環境) ⑧=人種(民族) ⑥=心理(行動様式) ③=文化(季節語のような詩的用語)
D 文化の形態と対人行動様式

重久 剛 「比較心理・行動様式」p. 192

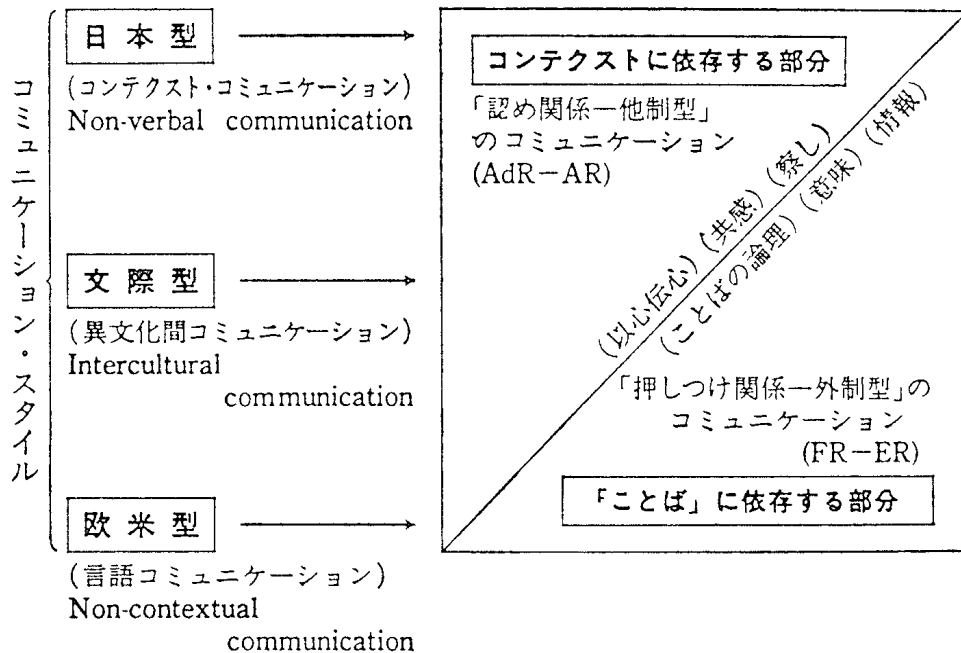


図 2 コミュニケーション・スタイルの比較文化

- 「日本型」のコミュニケーション＝日本文化のコンテキスト（その場の雰囲気、前後関係、文脈、過去とのつながり、言外の意味、間柄、状況、背景など）に依存する度合いが高い。
- 「欧米型」のコミュニケーション＝欧米語の論理・意味内容（message, information）に依存する度合いが高い。

重久 剛 前掲書 p. 193

イ語とスラブ語の合成語であるイディッシュ (Yiddish), ロマンシュ語 (Romansh 又は Rhaeto-Romanic), スイスの 4 つの国語のうちのひとつでドイツ語とイタリア語の中間語, クレオール語 (Creole) 混交語でなまった英語・フランス語・スペイン語, 米国ルイジアナ州のフランス系移民の子孫が話す。ピジン英語 (Pidgin English) 混成英語で中国・メラネシア・西アフリカなどで話される英語をもとにした中国語, インドネシア語, アフリカ諸語の商業用の補助言語, そして人工言語のエスペラント語 (Esperanto) など合成語や中間語・統一語である。これらの好ましい条件は, どちらかが「優勢」*¹³ あるいは「劣勢」といった「優劣」又は「主従関係」がみられないことである。両言語が「友好 (友交) 的な関係」「相互協力関係」をなしているのである。つまり言語の「融合化」(unification) である。

ここで国際語としての英語に話題を戻す。前述したように米語は「民族語」であるということ以外は, すべての国際語としての強力な資質を具えている。

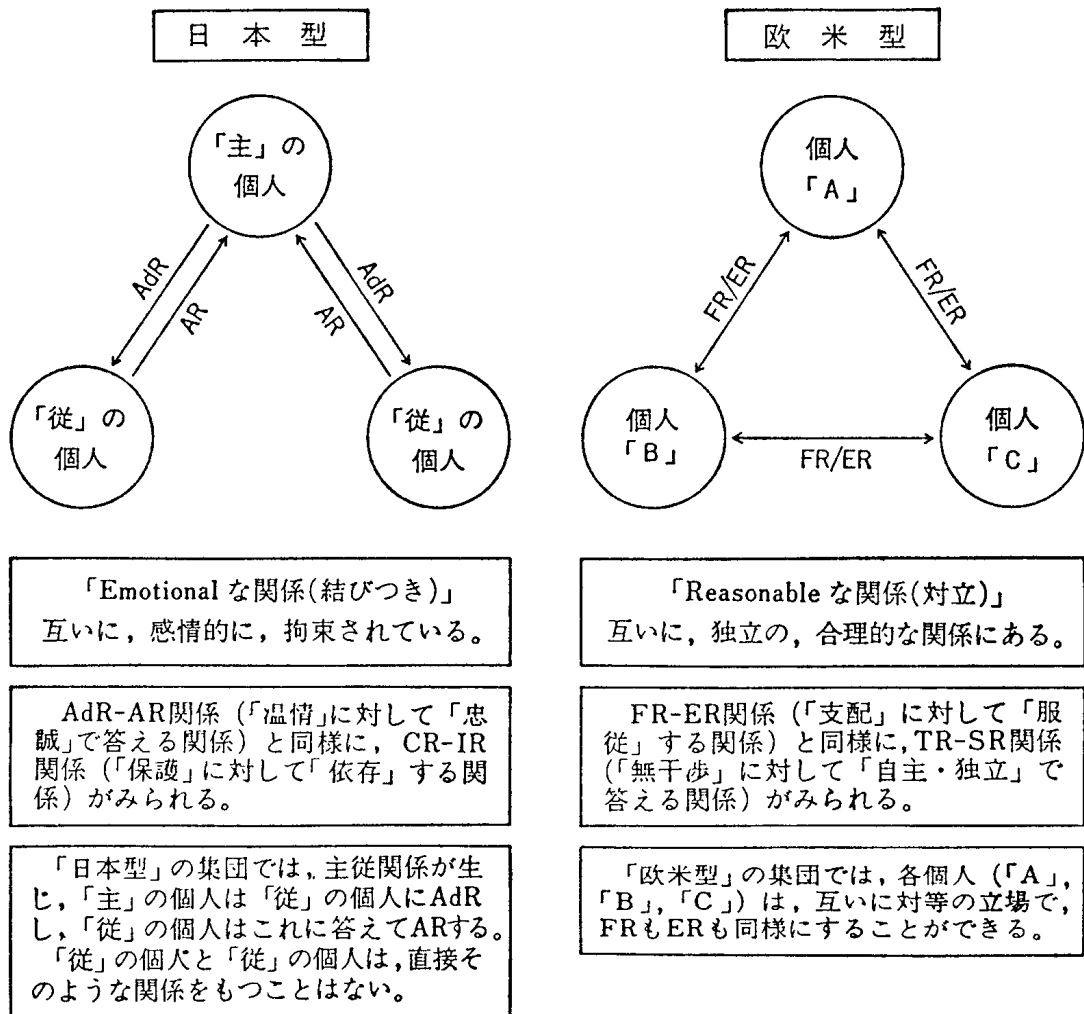


図 3 「日本型」の集団構造と「欧米型」の集団構造

〔日本型〕	〔欧米型〕
AdR=「認め」の態度による働きかけ (以心伝心)	FR=「押しつけ」の態度による働きかけ (自己主張・説得)
AR=「他制型」の対応 (察し)	ER=「外制型」の対応 (服従・納得)
CR=「受けとめ」の態度 (甘やかし)	TR=「任せ」の態度 (信頼・無干渉)
IR=「内制型」の対応 (甘える)	SR=「自制型」の対応 (自信・無援)

重久 剛 前掲書 p. 195

コンテクスト度	動 (心) 域	社会的意識	価値観 (認知過程)	コミュニケーション	人間関係
日本文化 Context rich culture	人々の間で、互いに共有する心の領域 (共感・コンテクスト*) が広い。 [Context sensitive]	「みんなと同じ」 (中流意識) → 「集団凝集性」	「相互依存」 → 「情緒性」 (パトスの)	「以心伝心」 (AdR) ↔ 「察し」 (AR) (コンテクスト) [Context dependent]	「Informal」 (private-self) → (ホンネ) 「ウチ関係」
欧米文化 Context poor culture	各人の独自の心の領域 (自己理解・確信・自己効力**) が広い。 [Context, insensitive]	「自分は自分」 (ユニークさ) → 「個人分散性」	「自主・独立」 → 「合理性」 (ロゴスの)	「自己主張」 (FR) ↔ 「情報理解」 (ER) (言語) [Context independent]	「Formal」 (public-self) → (タテマエ) 「ソト関係」

図 4 文化のコンテクストと心理・行動様式の対比

* 図 1 参照

** self-efficacy, 効力感, 自己達成可能感, competence

重久 剛 前掲書 p. 197

また米国は移民の国のため、他のどの国よりも世界の様々な人種を受け入れ、その結果様々な言語・生活様式が混在する国でもある。その中にはハイコンテキスト*¹⁴な言語体系を用いる韓国、日本、中国、ギリシャ、スペイン、イタリア、アラブ諸国語も含まれている。南部のルイジアナ州などではすでにクレオール化した言語もある。このように系統の異なる複数の既成言語から、自然発生的に、合成語・中間語・統一言語が形成されるクレオール現象(Creolizing phenomenon)が、米国の多様性言語、社会の中で起これば、インド・ヨーロッパ語からスタートした英語も「欧米文化」に限定された枠組を脱して、広く全世界の民族が等しく共有する「国際共通自然言語」になりうる。

IV. おわりに

科学技術の進歩はめざましく、地球は日に日に小さくなってゆき、世界自然環境保護、エネルギー問題、人口問題など、人類全体の問題が真剣に研究されている。地球は1つで「国際的なコミュニティ」である。しかし現在世界各地では多様な言語・約 3500*¹⁵が使用されている。国際連合では 1989 年末現在*¹⁶で 159 ケ国が加盟しており、国連公用語は、英語・フランス語・スペイン語・ロシア語・中国語・アラビア語の 6 ケ国である。また日常の作業語に英語・フランス語・スペイン語・ロシア語の 4 ケ国語が使用され、国連で行われた演説はそれが作業語で行なわれた場合は他のすべての作業語に通訳される。他の三ヶ国の公用語で行われた演説は二ヶ国語の作業語に通訳されなくてはならないので手間と時間、費用が莫大にかかる。この不経済を考慮しただけでも 1 言語でコミュニケーション出来る方が合理的であると考えるのは当然である。

そこで現在国際語となっている米語をより長く国際共通語として存続可能にさせるため、その成長発展に希望をかけるわけである。過去のフランス語が英語を多量に吸収したように、移民の国である米国は多様な言語を英語構造の中に吸収、改良、合成、融合又は統合できるはずである。その過程は急速でないにしても、英語を母語としない民族や文化の人々が出来る限り公平に使用出来る国際共通語の道具に作りあげてゆくべきだ。

ここで前述したサピアの仮説に戻るが、彼の主張する、我々の見・経験する世界が、我々の言語習慣を通して無意識のうちに形成されるともしするならば、日本文化の『なる』*¹⁷、『生れる』の発想法を西欧文化の枠組の『つくる』、『する』を母体とした国際英語の中に組みこんでおかねばならない。又は組みこむように日本人も盛んに和製英語を通して日本の情報を世界に発信

してゆかねばならない。但し、ここでいう和製英語、Japanese English とは、一般に侮蔑の対象となっている通じない英語のことではない。発想もコンテクスト度も違う言語体系の中で日本人は英語にない言葉、概念、慣習などを英語の枠組の中で探索し、一番近い言葉、概念なりを捜し出して英語構造の中に並べているわけである。同じ人間であるから同じ発想をするのも多いが、違う場合も多くある。思考段階に至っては、母語の影響なく発想することは、特別な訓練を受けた者でない限り不可能に近く、当然その話者の英語にはなんらかの割合で母語との干渉が起こる。言葉は生きものである。それを使用する人間によって言語は育成・発達させられる。日本的発想をおびた和製英語も少しではあるが完全に英語となっている。もっと多量にこの和製英語というハードを使用して、世界に貢献出来るソフトを発信するべきである。重久剛博士によると「多言語による合成的記述、『クレオール記述』の典型は、それぞれの文化からの『視点』（概念・意味内容・コンテクスト）を、でき得る限り『公平に』（culture-fair）かつ『客観的に』（scientific）網羅することを要求される。」としてエスペラントに希望を託している。筆者は、エスペラントにではなく国際英語にこれを託すのである。そのためには、英語圏の人々も、英米語は世界の人々の言語であるということをよく認識して、非英語圏の人々に寛大で互に国際英語を育成しようという態度が要求される。ちょうど日本国技であった柔道が世界の柔道に昇格したように。

参 考 文 献

- 二木紘三、『国際語の歴史と思想』、毎日新聞社、1981。
渡部昇一、『アングロサクソンと日本人』、新潮選書、1987。
ハーバート・パッシン、加瀬英明、竹村健一、『アメリカ人の発想・日本人の発想』、徳間書店、1979。
渡辺武達、『ジャパリッシュのすすめ』、日本人の国際英語、朝日選書、229、1983。
長谷川文雄、ボストン・フューチャーグループ、『アメリカの十年後』、イースト・プレス、1990。
ハーバート・パッシン著、徳岡孝夫訳、『英語化する日本社会』、サイマル出版会、1982。
横^{よこはぎ}佩道彦、『和製英語を正す』、朝日イブニングニュース社、1982。
「言語生活」Vol. 19, No. 1 大修館書店。
林雄二郎・鈴木孝夫・アントニオ・アルフォンソ、『日本語は国際語になるか』、TBSブリタニカ、1989。
E・サピア、B・L・ウォーフ、池上嘉彦訳、『文化人類学と言語学』、弘文堂、1970。

阪東 宏,『ポーランド入門』,三省堂,1987.
 鈴木孝夫,『閉された言語・日本語の世界』,新潮選書,1987.
 石綿敏雄,『外来語と英語の谷間』,秋山叢書,1983.
 Lewis Herman & Marguerite Shalett herman, *AMERICAN DIALECTS*, Theatre Arts Books, 1983.
 Joiner & Westphal, *Developing Communication Skills*, Newbury House, 1987.
 Randolph Quirk, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, Jan Svartvik, *A GRAMMAR OF CONTEMPORARY ENGLISH*, Longman, 1972.
 Edward T. Hall, *The Hidden Dimension*, Anchor Books, 1969.
 Edward T. Hall, *The Silent Language*, Anchor Books, 1959.
 Joel Kotkin & Yoriko Kishimoto, *The Third Century*, Kodansha International, 1988.
 Tachio Saito, 'The choice of Lithuania'-The Mother Country of Dr. L. L. Zemenhof, creator of Esperanto-*The Aoyama Journal of International Politics, Economics and Business* No. 17, 1990.

注

1. Edward Sapir "The Function of an International Auxiliary Language" 1931.
2. 桃井勝彦,「日本の開放と日本語の世界語化」, pp. 217-218, 1989.
3. 世界伝記大事典, ほるぷ出版, 1973.
4. 二木紘三,『国際語の歴史と思想』, 毎日新聞社 pp. 215, 1981.
5. ブリタニカ国際大百科事典
6. 二木紘三,『前掲書』, pp. 220.
- 7.『前掲書』, pp. 254-255.
- 8.『前掲書』, pp. 254.
9. E. サピア, B. L. ウォーフ他著, 池上嘉彦訳,『文化人類学と言語学』, 弘文堂, p. 4, 1970.
- 10.『現代用語の基礎知識』, 哲学思想用語, pp. 1086.
11. 重久剛編,『比較文化論』, 建帛社, 1982, 図を参照.
- 12.『前掲書』, pp. 264-273.
- 13.『前掲書』, pp. 266.
14. 福井 有,「日本的経営と日・欧米経済摩擦」,『比較文化論』, pp. 118.
- 15.『世界大百科事典』, Vo. 9, 平凡社, 1981.
16. *Word Yearbook* 世界年鑑共同通信社, 1990.
17. 重久 剛,『前掲書』, pp. 169.